

自然の叛乱

— 思想史的スケッチ —

清水多吉

—

まず始めに、この論文で何故に「自然」の叛乱“die Revolte der Natur”⁽¹⁾ について、特に「自然」について考えてみなければならぬかの理由を申し述べてみたい。それは、戦後のある時期以降、より正確に言えば六〇年代以降、人間における自然的要素が随所で叛乱をおこし、従来のカツコツキの理性的立場からする統制を各所で半身不随にしているからである。これは、単に日本の現象であるのみならず、アメリカ、フランス、西独、イタリア等、今日の先進資本主義諸国に共通の現象であるといえる。

自然の叛乱
これらの先進資本主義諸国の学生たちの情念あるいは「自然」的要素は、政治的な保守反動派に対して反撃を加えつつあるばかりでなく、旧来のマルクス主義者、革新派とよばれてきていた立場の人々に対しても呵責なき攻撃を加えている。また生産場面について言うなら、この高度発展社会を支えるための労務管理は複雑多岐をきわめ、ひとり

あたりの労務管理者が管理する労働者の数はますます減少せざるをえなくなってきた。西独、イタリアを中心とする西欧諸国における昨今の争議が、戦後の伝統となってきた社民、共産党指導の労働争議の枠を大きくはみ出しながら展開されつつあるのは、既にジャーナリズムが伝えつつある通りである。⁽²⁾ 勿論、この事例は、単純な自然的要素の叛乱といった問題で論じ尽されるべきものではないだろう。しかしながら、従来からの労務管理的統制、旧来の社民、共産党型指導が有効性を大きく失墜しつつあることは事実である。これらの現象と平行して進展しつつある風俗的次元における人間の自然的要素の爆発、叛乱は、あえて実例をあげるまでもなく周知の事実であるだろう。

ところで、近代、特に現代においては、人間における「自然」的要素は、ややもすると非理性的なものとして非難的とされてきたのも事実である。人間における「自然」的要素を非合理的いしは、非理性的なものとして非難するのは、言うまでもなく近代合理主義の立場であり、またある場合には、近代合理主義の延長線上に位する旧マルクス主義の立場でもある。だが、人間における「自然」的要素を単純に非合理として切りすてる近代合理主義、ないし旧マルクス主義が、実はいかに近代における理性的立場というものと縁遠いものであるかの論証を、かつて筆者は多くの所で論じておいた。⁽³⁾ 要するに、近代合理主義者ないし旧マルクス主義者のいう理性とは、既成性 *Positivität*⁽⁴⁾ に貫かれたものであり、現状肯定的なものであり、十八世紀後半から十九世紀初頭にかけての近代の理性がもっていた否定性 *Negativität* をまったく喪失したものでしかないということである。

近代における理性のあり方を論ずることによって、十九世紀中期以降の近代合理主義がいかに非合理的なものになって来たかということの論証は、逆の立場で言うなら、近代における自然観を述べることによって、人間における「自然」的要素の尊重が、いかに近代における合理的なものの考え方に立つものであるかを論ずることによって示されるだろう。

ソクラテス以前のギリシア思想（イオニアの自然哲学）以来、自然についての考察なら、多くのヴァリエーションを生んできている。生氣論的なイオニアの自然観、目的論的なアリストテレスの自然観、ルネッサンス期の神秘的自然観、十七世紀ないし十八世紀の力学的・機械的自然観、十九世紀初頭のドイツにおける有機的（ないし歴史化された）自然観等々……がそれである。さしあたってここでは、古代、ルネッサンス期の自然哲学はしばらくおき、十七・八世紀以降の自然観に限定して論を進めて行きたい。

普通、ニュートン力学に代表される十七世紀の自然観は、無機的なものと設定する反面、その背後に統一的な世界像をもっていた。無機的、機械的な自然が結局のところ秩序と調和とをたもっていることから、ニュートン力学の背後には理神論的世界観がひかえていたわけである。十八世紀フランスの機械的唯物論、および啓蒙思想は、このような無機的機械的自然およびその法則が、人間にも（ラメトリー）、社会事象にも（例えばフィジオクラット）貫徹されるものであることを主張した。批判期以前のカントがもっていた自然観は、まさにそのような力学的無機的なものと、統一的な世界像との両者であった。批判期に入ってからカントの立場も、自然観については変りはない。カントにおける二元論、つまり、経験的所与と悟性・感性の形式といった場合の経験的所与とは、「因果性の原則」(K. d. r. V. Elementarlehre II. Transz. Logik)に支配される自然⁽⁵⁾と同じことであり、とりもなおさずニュートン力学の対象とした自然と同一のものであったのである。

ところでカントの問題とした所与としての経験（自然）とは、認識主観に対して顕わになるところの客観の問題に帰着する。かくて、カントに続くドイツ観念論者は、カントが未解決のままに残した主観——客観の二元論を一元的

に解決して行こうとしたのである。カントにとっては経験の対象の全体、つまり客観であった自然を、主観と一元的に統一しようと試みたのは、シェリングであった。周知の通りシェリングは、認識主観（自我）と自然とが絶対的に帰一する「静止と無活動の深淵」、「絶対的平静」、「万物の母」、「根源的な夜」などを想定する⁽⁶⁾。シェリングにとって、すべてのものをのみこむこの深淵から、いかにして自然が出てくるかが問題となった。その説明に自然をしてデイナーミッシュなもの、有機的なものとし、自然の現出を世界の根底にある意欲（Wollen）をもって理由づけた。

シェリングの考える、言うならば有機的自然観は、ひとりシェリングの思考であるばかりでなく、十九世紀初頭の一つの時代的思考性であったと考えてよい。ヘルダー、ゲーエ、ノヴァリスなどの自然観をあげつらうまでもなく、有機的自然観は、ドイツ・ロマンテークの基本的思考性であったわけである。そして、十九世紀初頭ドイツ・ロマンテークの有機的自然観は、十七・八世紀の無機力学的自然観に対決するもの、ある場合には十七・八世紀の無機力学的自然観に対する反動とさえみなされたのである。

だが、意欲をバネにしようとも深淵から自然が現出してくるシェリングの説明は、ヘーゲルならずとも、暗闇から牡牛を引き出すごとく、ピストルから弾丸が飛び出すごとく唐突なものであった⁽⁷⁾。カントの残した主観——客観問題をシェリングのような唐突な解決ではない仕方⁽⁷⁾で解決すべく、ヘーゲルは絶対精神の自己顯示の一階梯に自然を置く。絶対精神の自己顯示の過程は弁証法と呼ばれるものである。もっとも、一切のものが絶対精神より発し、また絶対精神に帰一するヘーゲル論理は、歴史のアナロジーから出発していた。それ故、ヘーゲルの場合、自然が問題になる場合があっても歴史にアナロジー化された自然であるの言うまでもない。ヘーゲルの言う理性が人間主体のみならず、対象界をも貫いているという思想は、歴史をアナロジー化してはじめて成り立つものであった⁽⁸⁾。

ヘーゲルの定礎した歴史にアナロジー化された自然を、はっきりと歴史化された自然とおきかえたのはマルクスで

あった。マルクスの歴史化された自然観は、フオイエルバッハの感性的自然を一度くぐり抜けることによって、より
礎乎としたものとなる。⁽⁹⁾

カントとドイツ観念論、およびドイツ観念論を受けたマルクスにいたるまで、自然は以上述べてきたように、それ
ぞれの扱われ方をしてきた。ところで、それぞれに扱われてきたにも拘らず、この思想的系譜において自然を問題に
した姿勢には一貫したものがあつた。それは端的に言うなら、やはり認識主観に対して頭わになつてゐる客観、対象
界をどのように説明するのか、ということであつた（説明解釈ではなく、変革することだと主張してゐるあのフオイ
エルバッハに関する十一のテーゼも、実はヘーゲルの説明解釈にある置き換えをすることによって成立するのであつ
て、ドイツ観念論の発展延長線上にある思考性としてよい）。この認識論的問いは、ヘーゲルの歴史にアナロジー
化された自然、更にはマルクスにおける社会化された自然において、一応の解決をみる。一応と限定をつけた理由
は、次章において論じてみよう。

ところで、歴史化された自然という思考性によって、カント以来の認識論的問いが解決されたということ、別の
表現で言えば、認識主観をダイナミッシュな行為する主体（勿論、認識も行為の一つとされる）とおきかえること
によつて、この行為する主体の営為の結果としての客観、対象界、自然を想定したということである。この図式にお
いてなら、行為する主体を支える理性は、したがつてまた客観、対象界、自然をも貫いてゐることになり、理性の貫
徹がみられない個別存在としての客観、対象界、自然は、理性が貫徹されるよう否定、変革されねばならないとされ
る。⁽¹⁰⁾

自然の叛乱
それ故、ヘーゲル——マルクスのこの系譜は、近代における自我論、理性論の最末端、一絶頂を示すといつてよ
い。だが、このような系譜の上に誕生したマルクス主義自身の中においても、実は、行為する主体の理性に服する自

然ではない別種の自然が語られてくる。これは、近代における自我論、認識論的主観——客観関係が見事に一元的に完結したと思われた時点におけるある種の破綻であり、その原因はヘーゲル哲学における自然哲学の破綻にまで求めることができるだろう。つまり、ヘーゲル哲学は、自然を歴史にアナロジー化することによって、またドイツ・ロマンティックの有機的自然を想定することによって、自然哲学をその壮大なエンチクロペディーの中に位置づけたのであったが、十七、八世紀の力学的無機的自然はついにその体系のラチ外に置かれたままであった、ということである。

三

歴史化された自然という思考性によって、カント以来の認識論的問いが、マルクスにおいて一応解決されたかに見えたが、これに対して、歴史化されない自然、言うならば無機的自然、行為する主体の結果ではない自然を再度提出してきたのがエンゲルスであった。エンゲルスの自然観は、通常自然弁証法と称されているのであるが、その主張は未定稿「自然の弁証法」⁽¹¹⁾(原題の *Dialektik der Natur* が自然弁証法ととられてきた事態は、様々な誤解を生んでくるものになった)、および「反デューリング論」などによってみることもできる。量から質へ、対立物の統一、否定の否定といった三つの法則を柱として、これを思考の法則ではなく、自然現象の法則として定礎したのである。水が一〇〇°Cになれば水蒸気になる話⁽¹²⁾、炭素化合物が炭素、水素の数によってそれぞれ全く性質の異なる化合物になる話、 $1 \times 1 = 1$ となる話、麦粒が地に落ちて、それぞれの形を否定することによってまた麦粒となる話……などが、自然現象における弁証法の貫徹している実例としてあげられる。

これらの恣意的な例は、まさに自然現象に対する恣意的な説明にしかすぎなかったのであるが、このような思考性

がマルクス主義に与えた影響は大きかった。エンゲルスが自然についてこのような考察を加えた事實は、マルクスが資本主義の経済的構造、経済法則を鉄のごとき必然性としてとらえ、経済法則をあたかも自然法則であるかのように主張したという解釈とあいまって、世紀末から二十世紀初頭にかけて、マルクス主義内に悪しき客観主義を生んでくることがなる。例えば、鉄のごとき必然性としての経済法則はあたかも自然法則であるかのような考えられ、歴史における個人の自由と必然との問題が、あたかも自然現象における必然と人間の自由との問題のように論じられた（例えば、プレハーノフ「歴史における個人の役割」にあげられている例証をみよ）。

いうならば、経済決定論に落ち入ったメンシェヴィキに対して、強固な意識の結集体（党）の意義を強調したレーニンも、自然についての考察はエンゲルスの系譜を引くものであった。「唯物論と経験批判論」⁽¹³⁾（一九〇八年）の第二版附録で述べられている自然弁証法についてのレーニンの見解は、エンゲルスとの若干の差異を問題とするより、むしろエンゲルスの自然観の延長線上に考えられるべきものである。更にスターリンの「弁証法的唯物論と史的唯物論」⁽¹⁴⁾（一九三八年）においては、エンゲルス以来の自然の系譜が絶対的な位置に立つことになる。つまり、スターリンにあっては、エンゲルスの「自然の弁証法」が最高の依りどころとされ、弁証法は物質界と認識との両方にとって普遍的な法則となり、また包括的な科学的世界観ともみなされるようになった。かくて、弁証法的唯物論は史的唯物論の上位に立ち、後者は前者の「社会の歴史」部門への適用だと理解されるようになった⁽¹⁴⁾。これを端的に言うなら、かつてマルクスのとった歴史化された自然という立場から、スターリン段階では自然化された歴史へと転開がとげられた、ということである。

自然現象における弁証法の説明が、エンゲルス自身においては恣意的なものであることは既に述べておいた。これが布延化されて、スターリン段階における弁証法的唯物論は、弁証法を名乗りつつも無機的自然観を背景とした機械

的唯物論とかわりのないものであるのは言うまでもない。自然化された歴史は、そのような機械的唯物論を歴史に強引に適用しただけのことである。

ところでエンゲルスの「自然の弁証法」は、確かに恣意的なものであったが、それにしても十九世紀中期以降の自然科学の発展に触発されたものであることは事実である。エンゲルスが触発された自然科学的諸発見は、普通、細胞の発見、エネルギーの保存と転化との法則の発見、ダーウィンの進化論などであるといわれている。そのいずれもが、旧来の自然観をくつがえし、十九世紀における新たな価値観の転開をもたらしたものであるのは言うまでもない。数年間を自然科学の研究に費したエンゲルスがこれらの画期的諸発見、諸事実に目をうばわれたのも無理からぬことであった。だが、十九世紀後半以降からの自然科学の発展は、エンゲルスの恣意的利用などとはほとんど無関係に発展し、世紀末にいたっては物理学における物質観に重大なる転換期を迎えるにいたった。すべての実体や原因を感覚に帰せしめる所謂マツハ主義がそれである。これに対してレーニンが再度素朴實在論をもって答え、「唯物論と経験批判論」をものしたわけである。しかし、二十世紀物理学を中心とした自然科学は、またレーニンの説明などとも無関係に展開され、非日常的物理学の世界では、ハイゼンベルク等の量子力学を中心として新たな物質観⁽¹⁵⁾を展開してきたのである。

今、これ以上非日常的物理学の世界の諸問題を述べるつもりはない。今、問題にしようと思うのは、物理学を中心とした自然科学自体の発展とは別な日常世界（この世界では、ニュートンの力学的無機的自然観が妥当している）における自然観であり、この自然観に対する人間の対応の問題である。

さきに十九世紀初頭は、それ以前の機械的自然観に対する反動として、有機的自然観が支配的であったことを述べておいた。この有機的自然を人間的、歴史的ならびに社会的な自然に置きかえて行ったのがマルクスであり、エンゲルスは逆に有機的自然をもう一度無機的なものとして行ったことも述べておいた。ところで、近代（特に十九世紀中期以降）における自然科学の発展とは、有機的自然観を逐次無機的なものに置き換えることによって促進されてきたのは言うまでもない。したがって、エンゲルスが十九世紀初頭の有機的自然観ないし歴史化された自然観をもとにして構成された論理（弁証法）を、十九世紀中期以降の無機的な自然の論理としても理解しようとしたことは、自然科学の発展方向と同一の方向性を指向しつつも、基本的には無理な結びつけ方であったのである。

有機的自然観を無機化することによって発展してきた自然科学は、すべてを数量化し、計算可能の枠内で対象に接する。ここで支配している論理は形式論理であり、実験と観察を基にした帰納的思考であり、演積的推理であった。勿論、質が問題とならないわけではないが、質もまた数量化されることによってはじめて自然科学的思考の枠内に浮びあがってくることになる。このような思考性は資本主義社会における商品価値の数量化と同一であるといった風な短絡のさせ方をするつもりはないが、少なくとも日常世界の思考性におよぼした影響力は強大なものがあつた。すべてのものを数量化することによって可能となる計算可能性と、また計算可能であるが故の交換可能性は、十九世紀中期以降のいわゆる合理性の二大支柱となつた。⁽¹⁶⁾

それ故、十九世紀中期以降に叫ばれてくる合理性（Rationalität）はとりもなおさず Ratio 即ち、「理性的なものを意味する）の根底には、十九世紀初頭までのドイツ観念論およびその当然の発展としてのマルクスが問題とした、主

観——客観の相互関係としての自然という要素は、まったく存在しなくなる。この合理性で問われてくる所与としての自然に対する人間の関係は、人間の思考を数量化することによって、所与として自然を数量化し、その限りで人間と自然とが結ばれることになる。そして、二十世紀前半まで続くこの関係によって、自然科学の発展と、その成果を基にした人間能力の（勿論、近代市民社会の）量的発展がもたらされてきたのであった。

このような十九世紀中期から二十世紀初頭にかけての日常的思考に対する反撃が、非日常的自然科学それ自体の発展の中で遂行されてくる事情は既に述べておいた。それ以外に、このような日常的な思考に対する反撃を準備したのは、おそらく世紀末から二十世紀初頭にかけての生の哲学であろう。生の哲学は、十九世紀中期以降の無機的自然に対して、何よりも有機的自然、有機的生命を対置させた。この生の哲学は、有機的、生氣論的発想で人間と自然を同化し、⁽¹⁷⁾十九世紀中期以降の数量化された人間と自然との関係に反抗する。生の哲学をある意味で最も発展させたものは、ナチズムの哲学であろう。

他の論文で述べておいたことだが、⁽¹⁸⁾ナチズムの哲学は、ルネッサンス・宗教改革期に問われた神秘的自然観（エックハルト、ルッターのそれ）、更には十九世紀初頭のシェリング的有機的自然観（世界の根底にある意欲、ないしシューペンハウエルの意志）をその中心にすえる。⁽¹⁹⁾一切の認識、一切の価値の根底をなす民族共同体、すべての観念、すべての行動の基底をなす血と大地といった考え方がこれである。その意味において、ナチズムの哲学は十九世紀中期以降の近代合理主義に対して、明確な反近代、反合理主義を打ち出したのである。

このようなナチズムの哲学は、単に机上の空論として展開されたものではなく、十九世紀中期以降の数量化された合理的思考から脱落したルンペン・プロレタリアート、ルンペン・インテリの情念に対して論理づけを与えたものである以上、ナチズムの哲学を、彼らルンペン、没落インテリの（有機的）自然的要素に叛乱の論理的根拠づけを与え

たものである、といつてもよいだろう。⁽²⁰⁾したがって、十九世紀中期以降の数量化された合理性が、日常世界に一般化されていたことに対して、(有機的)自然観をもって立ち向ったナチズムとは、単に理論的反撃であったばかりでなく、日常世界からの叛乱であり、それ故、(反)革命であったのである。

次に、このような反近代としてのナチズムに対する反撃が問題となってくる。もし、ナチズムの哲学のいう有機的
 自然観が、十九世紀中期以降の合理主義に対する歴史的反動であり、したがって、ナチズムを倒すためには十九世紀
 中期以降の合理性を再度貫徹させること、つまり、無機的機械的に数量化された人間と自然との関係を再度貫徹させ
 ることだといふのであれば、それはナチズム台頭の歴史的必然性についてまったく目を覆い、ナチズムの提起した
 (マイナスの)問題に何ら答えないことになるだろう。ナチズムの提起した問題に、弁証法的唯物論をもって答える
 などということも同断である。何故なら、既に述べておいたように、二十世紀に入つての弁証法的唯物論(特にスタ
 ーリン時代のそれ)は、機械的唯物論と何ら変りはなく、したがって、そのような弁証法的唯物論でナチズムに答え
 るとは、とりもなおさず十九世紀中期以降の無機的機械的自然観で答えるのと、実質的には何ら変りはないからであ
 る。では、ナチズムの哲学が提起した問題に答える視角は何であるだろうか。

五

ナチズムの哲学が、十九世紀中期以降の合理性に対するある種の反撃として台頭した以上、十九世紀中期以降の合
 理性あるいはその一変形としての弁証法的唯物論は何ら解答にならないとするなら、当然、主観——客観の相互関係
 を問うたあのドイツ観念論からマルクスにかけての諸問題が、再度問いなおされるべきだろうか。この問題について
 は、ある条件をつけてしっかりと答えたい。ある条件をつけてとはほかでもない。もし何の条件をもつけ加えずに、し

かりと答えたら、それは、ただちにこの種の問題提起が今にはじまったことではないことに気づくはずだからである。例えば、ルカーチのあの「歴史と階級意識」⁽²¹⁾（一九二三年）などは、商品経済によって主観（体）がいかに物象化されたものとなって行くか、つまり、客観（体）に対応する主観（体）の思考性のカテゴリー自体がいかに変質せしめられ物象化されて行くかを論じて、ドイツ観念論からマルクスにかけての問題提起を正当にも継承する地位を確保したのであった。この際の物象化（Verdinglichung）、つまり、物と化して行くといわれた場合の物とは、無機物的物質となって行くということではなく、歴史化された物となって行くという意味であるのは言うまでもない。要するに、この物象化のシェーマの論理の射程内にあるものも、歴史化された自然なのである。それはともあれ、商品経済下における物象化された主観（体）の終極にプロレタリアートが位いし、物象化の終極としてのプロレタリアートの意識によって商品経済が打破されて行く論証過程は、伝統的な主観——客観の相互関係というシェーマに立っての論の進め方であった。それ故、このシェーマはエンゲルス、レーニンばりの自然の弁証法と鋭く対立せざるをえなかったわけである。

では、ルカーチに代表されるこのシェーマに、何故に条件がつけ加えられねばならないというのであろうか。端的に言って、それは物象化の終極にあるものとしてのプロレタリアートの意識の歴史の変質が考慮に入れられねばならない、ということである。この小論文で、この歴史の変質を詳細に論じているいとまはない。結論的に言うなら、この「物象化とプロレタリアートの意識」論は、今世紀三〇年代以降の資本主義の新たな段階で、かなりの条件をつけ加えないかぎり、その有効性が疑われ出したということである。

伝統的な主観——客観の相互関係をもって論ぜられる自然観は、以上見てきたようにひっきり歴史化された自然という方向性をとることによってしか、論理シェーマの中に己れを位置づけえない。この論理シェーマにおいて、主

観（体）とは、要するに近代認識論的意味での主観であり、それ以上に追求されることはなかった。この系譜において、理性的なものは個別主観を貫いて一般的なものとして存在すると考えられるか、それとも個別主観の個別的なものでありつつ、予定調和あるいは見えざる神の手によって一般性を獲得すると考えられるかのいずれかであった。そのいずれにしても主観の方に理性が貫徹すると考えられていたのに相違はない。この理性の *Antonym* として考えられたのが自然であり、したがって、自然を理性の支配下に（それ故に主観の支配下に）服させようと考えてきたのが近代の思考の一般的特徴であった。ところで、このような主観（体）の認識論的シェーマが崩れるのは、二〇世紀に入ってからであった。周知の通り、それはフッサールによる主観の構造の中にある他在の分析、析出であった。この系譜についても、今、詳細に論ずるいとまはない。

フッサールの追求するこの方向性を、別な側面からたどったのはフロイトであった。特に後期のフロイトの自我論がそれである。この立場では伝統的な主観——客観関係をもとにした理性の貫徹する自我（主観）は消滅し、人間の内部にある自然と、超自我とよばれる社会規範との間のバランスをとるものにまで低落した。そしてこれまた周知の通り、人間の内部にある自然を歴史化されない自然ととるか、歴史化された自然ととるかが、フロイトとその後のフロイト左派との分岐点となったのである。追求された分野は、心理学という分科された一学問領域ではあったが、この系譜の二〇世紀思想史に与えた衝撃は大きかった。

六

さて、十九世紀中期以降の数量化された合理性に対して、有機的自然をもって立ち向ったナチズムの哲学は、反近代であることを述べておいた。ナチズムの有機的自然観が思想史的にみても逆行であることは理解できたのである

が、では十九世紀中期以降の数量化された近代を、何をもって乗りこえて行くことができるというのであろうか。その一つの手がかりとして、近代における主観——客観関係を中心においた認識論とその発展としてのルカーチの立場を、十九世紀中期以降の合理性に対する克服の道としてあげておいた。だが、それには一つの条件がつくことも記しておいた。その条件について、次に少しく考えてみなければなるまい。

まず、物象化の問題は何よりもその根底に近代初頭（十八世紀後半から十九世紀初頭にかけて）の理性論をもっているということである。それは「歴史と階級意識」にいたるまでの初期ルカーチの著作をたどっても追跡できることである。個別的歴史的経験を貫くイデーとしての全体性（Totalität）全体性カテゴリーといった彼の概念がそれである。⁽²²⁾この全体性とは、個別存在を貫いて己れを顕示するあのヘーゲルの理性と考えて大差はない。ただそれは、初期ルカーチ（見方によっては、勿論晩年のルカーチの著作までも貫いていることだが）においては、あくまでも追い求められるべきもの、イデーとしての全体性であった。物象化とは、全体性開示にとって、個別的歴史的主体の否定的ありようであった。

ルカーチの論理シェーマは、以上のように伝統的認識論の系譜に属するのであるが、伝統的認識論が現象学派の、あるいはフロイトの投げた衝撃によって大きく揺いできた事実を、どうルカーチの論理シェーマは受けとめるべきなのであろうか。ルカーチの主張を、近代のブルジョア合理主義を克服するための道として是認しつつも、条件を附与したわけはここにある。しかも、この条件は単に認識論上の問題だけではなく、実はもっと社会的歴史的諸事実、諸変化に関する認識と結びついている。というのは、物象化された意識からプロレタリアートの意識（ないし階級意識）というシェーマは依然として正当であるにしても、その転化過程は、前にも述べたように今世紀三〇年代以降歴史的に新たな段階に立ちいたっているからである。この問題については、稿を改めて論ずるつもりであるが、予測的に問

題を提起するなら、次のような点があげられるであろう。

まず、ルカーチにおける主観(体)とは、あくまでもヘーゲル的な意味での実体が転化されたものであり、個別的歴史そのものもそのような主観(体)の一つであった。ところで、この実体が主観(体)へと転化される構造は、果たして認識論的次元の問題であろうか。実体は主観(体)を通して語る以外には語りようがなく、これ自体はメタ・ヒストリアの次元に属するものである以上、われわれはこの主観(体)の個別存在の展開を問う以外にはない。ということは、理性の自己顕示の一階梯としての主観(体)は、理性ならざるものとの *Konflikt* を通してしか展開のしようがない、ということである。勿論、主観(体)とは単に歴史的な個別人間を指すばかりではなく、個別歴史そのものまで含まれる似上、主観(体)に対する理性ならざるものとは、社会的非合理が含まれるのは言うまでもない。しかしそれはともあれ、個別歴史における歴史的個別人間が基本的な主観(体)である以上、その主観(体)の展開は、個別人間のなかにひそむ理性ならざるものとの *Konflikt* が意味されるべきである。それは、かりに名づけて人間のなかにある「自然」と呼ばれるものである。この自然が歴史的的存在か、非歴史的的存在かという問題はおのずと次の問題に属するだろう。

歴史における個別主観(体)の理性と自然との *Konflikt* を問題にしたのは、ナチズムの有機的自然観に抵抗しつつ、他方十九世紀ブルジョア合理主義にも反撃を加えていた三〇年代初頭のフランクフルト学派⁽²³⁾であった。自由放任、夜警国家の時代から、土台、上部構造のすべての分野にわたって組織化、管理化が貫徹されてくる三〇年代以降の現代資本主義下において、フランクフルト学派が追求した理性に対する自然の *Konflikt*、自然の叛乱は、個別主観(体)の展開にとって基本的なものであるとともに、極めてアクチュアルなものであるとも言えるだろう。

注

- (1) Max Horkheimer; zur Kritik der instrumentellen Vernunft 1967 Fischer V. の中の “Die Revolte der Natur” 1947 年のこのスケッチの下敷となつてゐる。
- (2) 例えは “Der Spiegel” 22. September 1969.
- (3) 例えは「情況」六九年九、十月合併号拙稿『イデオロギーとしてのフアンシズム』参照。
- (4) Positivität, Negativität と同じ概念は、フランクフルト学派に共通のものである。例えは Herbert Marcuse; Reason and Revolution, The Humanities Press 1954 を参照の事。
- (5) Immanuel Kant; K. d. r. V. Elementarlehre II. Transz. Logik.
- (6) Schelling の例えは “Einkleitung zu den Entwurf eines Systems der Naturphilosophie” I. S. 721. “Bruno” II. S. 482 などを見よ。Schellings Werke Fritzy Eckarat 1907.
- (7) Hegel: Phänomenologie des Geistes, Vorrede.
- (8) 例えは Geory Lukács; Geschichte und Klassenbewußtsein, Luchterhand 1968. S. 175 においても、エンゲルの自然弁証法が、自然に関するヘーゲルの誤った例証の結果に由来するものであることが述べられ、弁証法は die historischsoziale Wirklichkeit に限定されるべきものであることが述べられている。
- (9) 常識的なことであるが、その例として『ドイチェ・イデオロギー』を参照のこと。ただし、『ドイチェ・イデオロギー』の特に「フオイエルバツハ篇」がどの程度エンゲルスの手になり、どの程度マルクスの手が加っているかといった考証はこの際、カッコに入れておく。
- (10) この立場は、初期からの晩年にいたるまでのヘーゲルにとって一貫した立場であった。例えは、初期の政治論集 “Die Verfassung Deutschlands” の主張と、晩年の論理学 “Wissenschaft der Logik” の基調とを比較してみればよいだろう。
- (11) Engels “Dialektik der Natur” Dietz 1952 年にもこの未定稿は一八七三年から一八八六年までに書きためられたものである。
- (12) 勿論、エンゲルスのあげるこれらの例証は、単にエンゲルのものであるのではなく、ヘーゲルの悪しき例によるものである場合がある。
- (13) 大月書店、レーニン全集、十四巻による。

スターリン「弁証法と史的唯物論」石堂清倫訳、国民文庫による。

- (14) 非コミンテルン系の西欧マルクス主義者は、この点を特に非難する。例えば Herbert Marcuse, *Soviet-Marxism—A Critical Analysis*. Columbia Univ. Press, 1958. を参照の事。
- (15) W. Karl Heisenberg; *Wandlungen in den Grundlagen der Naturwissenschaft*, S. Hirzel V. Stuttgart 1948.
- (16) 勿論、このような思考性が商品価値の数量化という社会的思考性に与えられているのは言うまでもない。
- (17) 例えば、生の哲学の影響を色濃く受けていた初期ルカーチの論文“*Metaphysik der Tragodie*” 1911~12. *Logos III* を参照のこと。
- (18) 前掲論文『イデオロギーとしてのファシズム』参照。
- (19) 掲論文のなかで、ファシズムのイデオロクとして取り扱ったのはローゼンベルク (Alfred Rosenberg) の『二〇世紀の神話』であった。
- (20) もっとも、ナチズムの理性観と自然観とが、奇妙な形で十九世紀中期以降の近代合理主義に近いものであったことを、フランクフルト学派は指摘している。例えば、前掲の M. Horkheimer; “*Die Revolte der Natur*” H. Marcuse; *Reason and Revolution* を参照の事。
- (21) G. Lukács の “*Geschichte und Klassenbewußtsein*” 以来、疎外と物象化の差異が広く論じられてきている。しかし、ここではこの差異をめぐる諸論争にも立ち入らないことにする。
- (22) ルカーチの全体性は「悲劇の形而上学」「小説の理論」以降、「歴史と階級意識」をも貫くライト・モチーフである。
- (23) ある意味で、この小論文の下敷となったホルクハイマーの諸著作は、三〇年代以降、多かれ少なかれすべての問題をめぐる論文である。いずれ拙訳によって刊行される予定である。